



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1996 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

洗礼の賜

〈新年の幼児洗礼式にあたって〉

ご両親、代父母の方々、そして親愛なる皆さん。

本日の聖体祭儀ではこの子供たちに洗礼が授けられますが、これは私たちに与えてたいへん意義深いことです。洗礼は神が子供たちに与えてくださるすばらしいお恵みですが、同時に子供の信仰教育の責任を担う者にとっては、将来キリスト信者として成長し、聖性に達するよう導くという仕事を委ねられることでもあります。洗礼者ヨハネは、本当の洗礼とは自分が今授けているような単なる象徴的な儀式(イエズスもお受けになったのですが)ではないことを、早くから明言し

ていました。

まことに、救い主がお定めになった洗礼は最初の秘跡です。原罪を取り除き、成聖の恩寵を靈魂に返してくれます。洗礼を受けた人は三位一体の神の生命にあずかり、御父の養子、イエズスの兄弟姉妹、キリストの民の成熟した一員、キリストの神秘体、天国での永遠の幸福を得るべき者となります。

「カトリック教会のカテキズム」では、七つの項目(1213、1284番)と説明用の八五の注釈を洗礼のために費やして「洗礼はキリスト教生活全ての基盤、超自然の生命への入口、他の秘跡にあずかるための扉」(1213

番)であると強調します。

カテキズムが簡潔明快かつ莊重雄弁に説く洗礼についての教えは、各人が黙想の中でこの秘跡の超越的本質への理解を深め、確信をもって忠実に生きるべきものです。

「洗礼は神からの最も美しくすばらしい賜である。：私たちがそれを賜、恩寵、塗油、啓発、不死の衣、再生の水、全て最も貴重なもの、の封印と呼ぶ。」(1210番) 加えて聖ペトロの言葉を借りるなら、洗礼を受けた者は「靈の建物の材料となる生きた石として、聖なる司祭職を務める。」(1ペトロ 2・5参照)

この崇高で基本的な秘跡の現実を照らしてみんなら、この子供たちのご両親、そして子供がキリスト信者として育つようご両親に協力するという尊く立派な責任を担う代父母の皆さんは、福音への忠実を証

する証人、首尾一貫した模範となる責任をお感じになることでしよう。キリスト者の道をたどる子供たちにつき添い、模範的な信仰を示し、常に祈りで支え、主の呼びかけに喜んで応えることが出来るよう助けるのです。忘れないでください。皆さんには大切な宝が委ねられています。

聖パウロの言葉を借りれば、私たちは死と復活という超越の秘義によって、イエズス・キリストにおいて洗礼を受けたのです。「私たちはその死における洗礼によってイエズスと共に葬られた。それは、御父の光榮によつてキリストが死者の中からよみがえったように、私たちもまた、新しい命に歩むためである。」(ローマ6・3-5)

贖い主は子供たちを優しく迎えてくださいます。「子供たちを私のところに来させよ。神の国を受け入れるのはこのような者たちである。」(マルコ10・14) 子供を尊重し、責任を取るべきことをはっきりとお教えになりました。家庭を人間的・靈的な成熟のための場とするよう神はお望みですが、子供たちが出来るかぎり聖性においても成長できるように、家族は助けてやらなければなりません。実際、子供たちは御国の使徒とな

るよう、また完全な超自然の幸福を尋ね求めるよう呼ばれています。それには、火のついたろうそくと白い衣に象徴される、信仰の光と清い生活が必要で

誕生するとは、ある特定の神の計画に加わることを意味します。偶然に生まれる人はいません。誰もが果たすべき何らかの使命を持っていきます。最初のうちははつきりとは分かりませんが、いつかは完全に悟る時が来ます。ですから私たちが神の道具であること、神は愛によって私たちを造り、愛を返してもらうことを望んでおられることを忘れないようにしましょう。

この子供たち、そして同伴の皆さんに、以上述べたことを心から希望しております。一人ひとりが、人間の生涯につきまとう困難や移ろいやすさきの中でも、神から委ねられた使命をまっとうすることが出来ますように。

信頼を込めて聖マリアと聖ヨセフ、守護の天使と受先者の守護聖人に祈りましょう。「新しい命」の旅路において彼らを助け、お守りください。主の甘美を味わい、天国の終わりのない喜びのうちに、神の御顔の光をおおぐことが出来ますように。(九三・一一)

紀元二千年を前に、 第二バチカン公会議を 振り返る

その1

第二バチカン公会議が終了したのは今から三十年前の一九六五年十二月八日でした。公会議はそれより三年前の十月十一日に、濃厚で先見の明ある教皇ヨハネ二三世の不動の勇氣によって開催され、教皇パウロ六世の偉大な精神と心が会議をしめくりました。紀元二千年を迎える私たちは、今世紀教会史上の「摂理による出来事」（「紀元二千年の到来」18番）とも言える画期的なこの公会議を振り返らずにいられません。

ヨハネ二三世の功績は公会議を召集したことにとどまりません。常に神の摂理への信頼に生き、「災厄の預言者」の面影とはほど遠かった教皇は、会議に希望の色調を与えたのでした。聖霊の息吹を受けた公会議は、教会の新たな春を準備しました。それは過去との決別ではなく、教会の遺産全体を最大限に生かしたものでした。

三十年の後、あの恩寵の日々に立ち返ることがますます必要となつていきます。使徒書簡「紀元二千年の到来」で述べたように（36番）全教会員の良心の糾明を必要とする事柄の中でも、問い直さずいられないのは公会議のメッセージがどこまで深く教会の生命と組織と行動の仕方に浸透したかという問題です。同様の問いかけは八五年の世界代表司教会議でも提議されました。それは現在でも通用します。もう一度公会議を見直し、その教えを真剣に受けとめ、その精神に浸ることが何よりも重要です。これからしばらく、偉大な公会議のテーマを振

り返って行くことにしましょう。歴史が教えるように、いずれの公会議も、実を結ぶまでには時間が必要でした。しかし私たちに、時の経過を待つだけでなく、神の恩寵の助けを借りてなすべきことがまだ多くあります。

至聖なるマリア、先の教皇パウロ六世はまさにあの公会議の時、御身を「教会の母」であると宣言しました。私たちをお導きください。聖霊降臨の夕べに弟子たちと共におられたその聖

母が、いま私たちの間におられることを感じ取ることができまじょうように。間もなく迎える紀元二千年に、私たち信者がキリストへの忠実を固め、福音のため一身を捧げることができるよう、聖母の助けを借りて神の聖霊への従順を願ひましょう。

十月十七日は国連の定めた世界の貧困撲滅の日です。私は五大陸に住む最も貧しい人々のために願ひます。あなた方は教会と人類共同体の中で選ばれた地位を占めていることを知ってほ

しいのです。私たちは、人生の苛酷な試練に立ち向かう貧しい人々の勇氣、子供たちを立派に育て上げる寛大な愛、困窮する仲間たちとの連帯感に拍手を送ります。神に愛された人間としての尊厳を保つために戦う彼らを励ましたいと思います。困難は時に彼らを社会の中核をなす雄弁な平和の使者にします。だから私たちは彼らを頼みとします。神よ、世界中の貧しい人々に祝福をお与えください！

（九五・十・十五）

キリストを信じる 全てのの人に

（キリスト教一致祈禱週間にあたって）

「私はぶどうの木で、あなたたちは枝である。私がその人の内にいるように、私にとどまる者は多くの実を結ぶ。私がいなくいとあなたたちには何一つできぬからである。」（ヨハネ15・5）

生命の象徴の基礎となるこのような記述は、聖書の中に繰り返し登場します。（イザヤ5・1〜7、エレミア2・21、エゼキエル15・1〜8参照）それは神と神の民との一致のシンボル、神がその民を選び、愛され

たことを示すシンボルです。イエズスはこのたとえを用いて、ご自身と弟子たちとの関係を説明されたのです。

自然の世界から取られたこのイメージは、イエズスと彼に従う者たちとの生命の交わりという超自然の秘義を生き生きと効果的に描き出しています。ぶどうの幹から枝に流れるのと同じ生命の樹液が師と弟子たちの間に流れ、同様に神の生命、「御父のみもとにあつて今私たちに現われた」（Iヨハネ1・2）

永遠の命が伝わっていきます。枝は互いの交わりによってつながっている

枝は幹につながり、幹から養分をもらって「実を結び」、花を咲かせ、成長します。弟子も同じようにして、主とつながっています。このつながりによって弟子たちは霊的に活動できる状態となり、実を結べるのです。「木にとどまらぬ枝は実を結べぬが、あなたたちも私にとどまらぬならそれと同じである。」（ヨハネ15・4）

枝自身には生命がありません。木につながっていない限り、生きることができません。枝の生命は木の生命です。同じ樹液が木と枝を巡っています。

▲福者ホセマリア・エスクリバー師による霊的黙想の書……キリスト者の生活を真剣に生きたいと願う人に、友のヒント、父の勧めのような黙想の材料を提供します。「道」（第10版）……定価一、六〇〇円 「拓」……定価一、六四八円 「鍛」……定価一、六〇〇円 いずれも送料は一冊三〇〇円、二冊以上五〇〇円です。

セイドラーの教理出版物には、キリストの変わることをない教えを普及させると共に、教理の知識を深めるための手引書などがあります。●現代の諸問題を考えるための手引書などがあります。●カトリック教会の教えに忠実な要理書 ●信

木も枝も同じ実を付けます。そこには破ることのできない絆があり、イエズスと弟子たちとのつながりを目に見えるように象徴しています。「私にとどまれ、私があなたたちにとどまっているように。」(同15・4)

枝がみな同じ樹液で養われているのなら、それらはどれもお互いに同じ交わりの中でつながり合っているはずで、愛のうちに一致すべしという命令は、この生命の交わりに由来するものです。「私が愛したように、あなたたちも互いに愛し合うこと。」(同15・12) それは強く、無条件で、限りのない愛です。イエズスは「友」(ご自分を信じる弟子たち)を贖うための苦しみと死を、愛と関連づけられました。「友人のために命を与える以上の大きな愛はない。」(同15・13) 贖いのわざへの言及は、キリストの弟子たちの行く先をさらに一層強調するようです。全員が一人の主に贖われているのです。

第二バチカン公会議「エキュメニズムに関する教令」は、この重要な交わりの秘義、特に洗礼によるキリストとの一致を強調して、「洗礼の秘跡が、主の制定に従って正しく授けられ、正しい心構えをもって受けられるならば、それによって人は、

十字架に付けられ栄光を受けたキリストに合体され、神の生命にあずかるために再生させられる。」(22番) 従って洗礼はキリストに従う者たち相互の、秘跡による一致の絆となります。不幸なことに、時を経て分裂が起り、キリスト教共同体を揺すぶっています。分裂は不和と分離を引き起こし、時には深刻で厳しい、しかもしばしば苦痛を伴う結果となりました。しかしどんな分裂も、「三位一体の神を奉じ、イエズスを主および救い主と認める人々」(1番)の間の基本的な一致を破壊することはできませんでした。

ご自分に従う者たちの一致を折ったキリストの意志に従い、聖霊の支えに信頼して、エキュメニカル運動は根気よく努力を続けています。一致を促す要素をはぐくみ、考え得る相違点を解消し、すでに部分的には共通となつていっているものを、信仰や秘跡の面で、また教会機構の調和の取れた組織化の面で、完全な一致へと発展させるのです。

エキュメニカル運動が進んでいるさまざまな企ても、正しいまことの神学上の対話も、それぞれが努力して行き着こうとするゴールは同じ、主が望まれた一致です。今年も一致への努力が示す希望のしるしの数々に対

し、主に感謝します。

さまざまな形で対話が、すでに幸先よくスタートした過程を助けています。重要事項に関する説明がなされ、いくつもの重大な問題、たとえば「義化」などについても研究がなされ、共通の理解が深まりました。つい最近、私は東方アッシリア教会の総主教と共通の信仰を宣言しました。私たちは共に、人となられた神のみことば・真の神・真の人であるイエズス・キリストへの共通の信仰を告白したので、この宣言は千五百年来続いてきたアッシリア教会との論争を終わらせるものでした。長い時と異なる文化に隔てられているとは言え、対話を通

じて誤解や偏見を解消することが可能であることをこの事実が証明しています。

たとえ障害があつても 真理を知ることができ

今までに得られた結果から見ると、乗り越えられそうにないと思えるような障害でも、真理をより良く知るため一歩前進する機会になり得ることがわかりました。それらは立ち向かわねばならぬ試練であり、個々のキリスト信者が熱意と行動と、それに恐らくは断固たる決意をもって取り組むことが求められています。木から流れて枝々をうるおす生命の樹液は「もつとやらねば」という決意をはぐく

みます。今や目前に迫った紀元二千年を迎えて、「いま以上に、もつと良く」キリスト教暦二千年代には、木につながる枝々の生命の交わりがまことのぶどうの木であるイエズス・キリストのより完全な反映となることを期待します。

兄弟姉妹の皆さん、意向を新たに、主に祈りましょう。忍耐強く、善意を忘れず、すでに選んだ道を歩き続けることができますように。平和と和解、神を称える声とされることのありませぬよう。そうしてこそ、私たちは世の人々を前に、確かな証しを立てることができるのですから。(九五・一二五)

信徒は神の国を広げる

教会シリーズ 31

1 以前、キリストに関する

カテケーシスでお話したように、王の職務はキリストに固有のもので、王職は旧約の、救いについての伝承の中で予見され、預言されてきました。キリストの創設による教会は、主のおかけで王職にあずかっています。(教会に関する

カテケーシスでお話した通り

です。) いよいよ、この世で贖いのわざを続ける神秘的・司牧的共同体―すなわち教会についての教えに照らし合わせ、信徒について考える時が来ました。ピオ十二世が一九四六年に述べた有名な言葉にあるように信徒が教会の部分ならば、彼らも当

然、教会の至高の王職に加わる資格があるということになります。

2 第二バチカン公会議「教

会憲章」は、私たちが救うために人となられた神の子イエズス・キリストが、十字架上の死と復活で頂点に達した贖いのわざを地上において果たされたと述べています。そして天に昇る前、キリストは弟子たちに仰せになりました。「私には天と地の一切の権威が与えられている。」(マテオ28・18) キリストご自身、この宣言を弟子た

不変の教え

ちへの使命と權威の授与に結び

付け、あらゆる国と民族に福音

を伝えてご自分が命じたことを

守るよう教えよ、と弟子たちに

命じられたのです。(同28・20

参照)弟子たちとキリストの王

職とのつながりはここに由来し

ます。まことにキリストは王で

あり、天からの真理を地上に伝

え(ヨハネ18・37参照)、それ

を使徒たちと教会に委ねて、

世々全世界に広めるようお命じ

になりました。キリストから受

けた真理に従って生き、それを

世に広めることは、公会議(教

会憲章36番)が述べ、使徒的勸

告(「信徒の召命と使命」14

平和の国である。」(36番)
この世でキリストの
王權を広める
再び公会議によれば、神の国
の発展に携わる信徒の働きは、
特にこの世での直接で具体的な
活動を通して実現します。一方
で司祭・修道者は靈的・宗教的
な面で信徒よりも特殊な役割を
持ち、個々の人の改心やキリス
トの神秘体の発展のために尽力
します。他方、信徒は直接この
世の秩序の中で働き、キリスト
の影響力を世に広めるよう召さ
れています。(信徒使徒職に関
する教令、7番参照)

3 信徒は自らの「キリスト
者としての王職」(「信
徒の召命と使命」14番)を、信
者として行使するよう招かれて
います。内では信仰の真理に
従って生き、外に向かっては愛
徳や勤勉な仕事ぶりを通して、
信仰や愛の行為が万人のため新
しい生命のパン種となるよう努
めることによって、王職を行使
するのです。「教会憲章」は述
べています。「主は自分の国を
信徒を通して広めることを望ん
でいる。主の国は真理と生命の
国、聖性と恩恵の国、義と愛と

4 つまり、信徒が(全教会
もそうですが)この世を評
見る目、特に人間的な事柄を評
価する能力、すなわち現世の良
い点と知恵の書に述べられてい
る宗教的次元を評価する能力を
持っているということになりま
す。「その御知恵で人間をつく
られたお方よ。それは、あなた
の御手につくられた人々をつか
さざり、聖性と正義でこの世を
治めるため。」(9・2・3)

5 教会が共にあずかっ
て、信徒という身分についての
真の神学の基礎となるもので
す。公会議文書「教会憲章」に
あるように、「信者はすべての
被造物の深遠な本性、価値、神
の賛美への方向づけを認め、ま
た世俗的活動によっても互いに
より聖なる生活へ向かって助け
合わなければならない。それは
世がキリストの精神によって染

6 また、「そのうえ信徒は
世の中に人を罪に押しや
るような制度や生活条件があれ
ばこれを改善して、これらの全
てが正義の法則にもとづくもの
となり、また諸徳の実践の妨げ
よりもむしろ助けとなるように
努力しなければならぬ。そう
することによって彼らは文化と
人間の諸活動に道徳的価値を与
えることができる。」(前掲
書、「カトリック教会のカテキ

7 ズム」309番参照)
「信徒は一人ひとり世に對
して主イエズスの復活と生命と
の証人であり、生きた神のしる
しでなければならぬ。すべて
の信徒は共同で、また各自の分
を尽くして、靈的実りによって
世を養わなければならない。主が
福音において幸いな者と宣言
した貧しい人、柔和な人、平和
をつくる人々を生かしている精
神を世に広めなければならぬ。
一言で言えば、「この世の中
に在るキリスト者は、肉体の中
にある靈魂のような」役割を
果たさなければならないのであ
る。」(教会憲章38番)

世を照らし、活気づけるとい
うこのプログラムはキリスト教
が誕生した頃にまでさかのぼれ
ることは、ディオゲネトゥスへ
の手紙などから明らかです。現
在もこれは、キリストの王国の
後継者、証人、協力者となる
人々の「王道」なのです。
(九四・二・九)

※「信者」とは、生まれて洗礼
を受けたばかりの幼児から、修
道者、司祭、教皇に至るまで、
洗礼を受けた全ての人を指しま
す。また「信徒」とは、修道者
や聖職者以外の、一般の信者の
ことを言います。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講義等を解説なしにそのまま
伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部百八十円 (送料別) 一年予約 送料
とも一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。
郵便振替 01130-8-72393

説教・講話・書簡等の抄記

聖母マリアは教会の聖性の模範

いつの時代にも聖母マリアは愛すべき「教会の御母」です。聖霊の賜を祈り求め、弟子たちをイエズスのもとに導く御母です。

(昨年九月から教皇様は「教会における聖母マリアの役割」をテーマに恒例の一般謁見でのカテケージスを始められました。今回はその第一回目です。)

1 前回まで教会とは何か、教会の使命とは、というテーマで掘り下げたお話を続けてきましたが、今回からは祝された処女、教会の聖性を完全に体現した模範である聖母に注目したいと思えます。

実は第二バチカン公会議の教父たちがすでに同じことをしています。救いの歴史における神の民の本質について説いた後、教父たちはその教説を、救いの中に働くマリアの役割を描くことでしめくろうとしました。事実、公会議文書「教会憲章」の第8章は、マリアに関する教えが教会論上重要なものであると強調しています。同時に、祝された処女の姿が教会の秘義を理解するための一助となること

2 公会議のマリア論について説明する前に、教会の始まりにおけるマリアの姿を使徒行録にそって見てみましょう。新約聖書のテキストの最初の方に、初期のキリスト教共同体の様子が描かれています。使徒たちの名を一人ずつ記した後で(1・13)著者ルカは、「婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちと共に、みな心を合わせて祈り続けていた」(1・14)と述べています。

マリア自身の姿がこの記述ではつきりと浮かんできます。マリアは使徒たちと共に、その名前が言及される唯一の人物です。マリアは、職務的・位階的な面とは異なる(けれども相補う)教会の一面を代表しているのです。

3 ルカは聖霊降臨の高間には何人かの婦人たちがいたことを記し、教会生活がその最初から女性の貢献を必要としたことを示しています。祈りの内に心を合わせる共同体の堅忍は、女性の存在と深く関わっているのです。これらは教会生活への女性固有の貢献の基本的な面を余す所なく表わしています。

「女の中で祝福された方」(ルカ1・42)マリアは、この女性的な使命をこの上なくよく果たしておられます。マリア以上に、全信者を力づけてねばり強く祈るよう勧めることのできる人がいるでしょうか。平和と愛を推進させることのできる人が他にいるでしょうか。

司牧の役目はイエズスから一人の使徒たちに任されたものであることは確かです。一方、マリアを中心とする高間の婦人たちは祈りに加わり、教会の中には司牧の任には当たらないが、キリストへの信仰によって集まった共同体の完全な成員である人々がいることを示しています。

4 聖霊の訪れを祈りながら待つ間(使徒行録1・14参照)そこに共にあったマリアの姿は、聖霊の働きによって神の御子が託身された時、マリアの果たした役割を思い起こさせます。(ルカ1・35参照)あ

最初の段階での処女マリアの役割と、現在果たしておられる役割とは、聖霊降臨の時の教会の宣言において密接に結び付いています。

教会が誕生した時のマリアの存在の大きさは、それ以前のイエズスの公生活中の控えめな関わりと比べればたいへん対照的に見えます。御子が宣教を始めた時、マリアはナザレに残りましたが、その間にも、カナの婚宴のような意義深い出来事がありました。何より、マリアがカルワリオでのいけにえの場に立ち会うことを妨げるものはありませんでした。

最初の共同体でのマリアの役割はたいへん重要なものです。ご昇天の後、聖霊降臨を待ちながら、イエズスの母は御子が始めた企ての最初の部分に携わっていました。

5 使徒行録は、マリアが高間(1・14)で「イエズスの兄弟たち」と共におられたと記しています。教会はこれを親族の者たちと共にいたと解釈していますが、家族の集まりと言うよりも、マリアに導かれてイエズスの肉親たちがキリストの

霊的家族に加わったというのが実際です。「神のみ旨を行なう者はすべて私の兄弟、姉妹、母である。」(マルコ3・35)

使徒行録の同じ場所(ルカ1・14)で、ルカはマリアを「イエズスの母」とはつきり記しています。天に昇った御子の存在の一部が御母の存在の内にとどまっていると

言いたいかのようです。マリアはイエズスの面影を弟子たちの心によみがえらせ、共同体の中にとどまることで教会の主キリストに対する忠誠のしるしとなりました。

ここでの「母」という呼び名は、教会の生命に寄り添う聖母の配慮を示しています。マリアは隣れみ深い全能の神が自身になされた数々の不思議を、教会に対して余すところなく伝えようとしたのです。

マリアはキリスト者の祈りの師 最初からマリアは「教会の母」の役目を果たしてきました。マリアの行動は、ルカが「心を合わせて」と伝えるように、使徒たちの相互理解を深め、時折り彼らの間に持ち上がったってほしいさを遠ざけました。

信者の共同体に向かって示されたマリアの母性は、教会の形成と発展に欠かせない聖霊の賜

説教・講話・書簡等の抄記

教皇様の聲・1月号付録

司祭の使命と 信徒の使命

を祈り求めることにとどまりませんでした。主の弟子たちに、絶え間ない神との交わりを教えただのです。

こうしてマリアはキリスト者の祈りの師、神との出会いの師となりました。司牧者と信者たちの働きがつねに主に発し、主から内的な動機を得ているのは、マリアのおかげです。

これまで述べてきたわずかな事柄からも、マリアと教会との間の関係が二人の母の比較という興味深いものであることがよくわかります。マリアの母としての使命と、「神の母」を見つめて自らの真の姿を求め求める教会の努力がそこにはつきりと示されます。

(九五・九・六)

位階制と霊の賜は 異なっているが相互補完的

(…) 教区の生命をよみがえらせるために、司祭・信徒の大きな努力が求められています。教会と同様、教区も全構成員がそれぞれ賜や能力を持ち寄って、互いを益し合う交わりであるべきです。交わりとはダイナミックな現実で、神の民のメンバー間の絶えざる賜と奉仕の与え合いを意味します。(…)

司祭も信徒も修道者も、自らの「聖職位階の賜と霊の種々の賜」(教会憲章4番参照)が互いに異なっているにもかかわらず、どれも皆「キリス

トの体を建てる」(エフェソ4・12)のために必要であることに気づく所から全てが始まります。洗礼を受けた者が皆平等であること(教会の伝統に深く根ざした真理ですが)をあまりに強調すると、全信者の持つ王としての司祭職と叙階の秘跡によって与えられる職位的司祭職との真の違いを軽視することになりかねないという意見が聞かれました。実際、二つの司祭職は「本質において」(教会憲章10番)異なるものではありませんが、優越とか支配とかいう意味での「権力」などはまったく関係ありません。どちらもキリス

の唯一の司祭職から発したもので、相互に補い合い、奉仕し合う仕組みになっているのです。(Pastores adbo vobis 17番参照)

真の交わりとは、互いの愛のうちにとどまる(1ヨハネ4・12)(13参照)ことです。それによって信徒も牧者もおのおのの独自性を尊重しつつ助け合うことができます。秘跡に関する教会の教えに完全に忠実を保つなら、「共同的奉仕の役割」と言われるものは、内的に一致して新しい福音宣教のために全力を注ぐ(「贖い主の使命」3番参照) 共同体作りの礎となります。

多くの教区で、宗教教育、カウンセリング、社会奉仕活動、管理運営などさまざまなやり方で信徒が司祭を助けているのは教会にとつてまことに幸いなことです。盛んになりつつあるこうした活動は、教会を活気づける聖霊の働きに他なりません。司祭の手が足りない場合、一時的に信徒が教区の運営に携わることも教会法の規定で認められています。(教会法典第 511条第2項、「信徒の召命と使命」23番参照) その場合、司祭は信者たちがそれらの「奉仕として負う」責任を、叙階された司祭に固有の *sacra potestas* (聖なる権能) と混同しないよう、十分注

意を払わなければなりません。教区共同体には牧者としての司祭がいなくてもいいとか、ましてやいない方が望ましいなどと考えるのは、司牧上得策とは言えません。働ける司祭の数が減っていることを(こんな状態は長く続かぬよう願っています)が信徒が司祭に取って替わるべきであるという摂理の表われのようには解釈するのは、キリストと教会の精神とは相容れぬことです。信徒の有する王としての司祭職を過大視するあまり、叙階された司祭の職位的司祭職を損なうことがあってはなりません。叙階によって司祭は聖体祭儀の執行者であるのみならず、自分に託された信徒たちの霊的な父、先導者、教師となるのです。(…)

信徒の使徒職は社会で

まともな教会論なら、叙階を受けた司祭の「信徒化」と信徒の「聖職化」を防ぐよう努めねばなりません。信徒は自らが教会内でどのような位置を占めるかを知っておくべきです。信徒は教えや秘跡の恩寵を受けるだけの存在ではありません。責任をもって働き、教会の福音宣教の使命を分担し、世を聖化するのです。福音の真理を社会生活と政治、経済、文化の中にもた

らすのは特に信徒の役目です。現世の仕事に従事し、世界を内側から聖化するという固有の使命があるのです。(教会憲章31番と「信徒の召命と使命」15番参照) 信徒がすべきことは「すべての満ち満ちるものを子に宿らせ」(コロサイ1・19参照) するため社会を秩序づけることであり、「神の代理として群れの上に立ち、教理の師、聖なる祭儀の司祭、統治の役務者」(教会憲章20番)である司教と、信仰において常に一致していることです。使徒的勧告「信徒の召命と使命」が指摘するように、要理教育及び信徒が「地においても、世においても、人類共同体においても、溶け込んでそれらと全面的に関わっている」(15番) ことを説くよう努めましょう。そうしてこそ信徒は、これが教会内で自らのなすべき最大の使徒職であることを理解できます。皆さんの絶えざる励ましが必要なのです。信徒は司教の聖性に力づけられ、まことの教えに導かれることを望んでいると同時に、この世で自分の自発性と自由を発揮できる場を望んでいるのです。(信徒使徒職に関する教令7番参照)

(…) (九三・七・二、ローマを訪問した米国籍司教団へのお話)

まともな教会論なら、叙階を受けた司祭の「信徒化」と信徒の「聖職化」を防ぐよう努めねばなりません。信徒は自らが教会内でどのような位置を占めるかを知っておくべきです。信徒は教えや秘跡の恩寵を受けるだけの存在ではありません。責任をもって働き、教会の福音宣教の使命を分担し、世を聖化するのです。福音の真理を社会生活と政治、経済、文化の中にもた